

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

## レプコン芸術の無形文化遺産登録とその後の動態： 中国青海省同仁県における考察

|       |   |
|-------|---|
| メタデータ | 言語: Japanese<br>出版者:<br>公開日: 2016-06-02<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 喬旦, 加布<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://doi.org/10.15021/00006065">https://doi.org/10.15021/00006065</a>                       |

## 第10章 レプコン芸術の無形文化遺産登録と その後の動態

— 中国青海省同仁県における考察 —

チョルテンジャブ（喬旦加布）

総合研究大学院大学

中国青海省黄南チベット族自治州同仁県では、チベットの歴史、仏教、文化と深く結びついた、レプコン（熱貢）芸術と総称される美術品および工芸品が発達している。同仁県は、チベット仏教芸術の中心地として、何世代にもわたって栄えてきた。現在でも、同地域の村々の男性の7～8割はなんらかの伝統芸術を継承する工芸職人である。農閑期に村人により制作されるレプコン芸術は、市場経済化が促進するにつれ重要な現金収入の源となっている。西部大開発や観光化政策が進み、またユネスコの無形文化遺産に登録されてから、レプコン芸術の美術品としての値段が高騰した。しかし同時に、それと反比例して、質が下がるなどの問題が出現している。本稿は、「レプコン芸術」の形成と分布、タンカ制作の過程、さらには無形文化遺産への登録と登録後の動態などについて述べる。

- |                     |                     |
|---------------------|---------------------|
| 1 はじめに              | 5 文革後の復興            |
| 2 青海省における非物質文化遺産の状況 | 6 絵師とタンカの作成過程       |
| 3 同仁県のレプコン芸術        | 7 無形文化遺産への登録とその後の動態 |
| 4 レプコン芸術の形成と発展      | 8 おわりに              |

キーワード：レプコン芸術、無形文化遺産、動態、同仁県、タンカ

### 1 はじめに

本稿では中国青海省黄南蔵族自治州同仁県、すなわちチベット・Amdo アムド<sup>1)</sup>のレプコン地域における民間芸術を取り上げる。この地域に発達した美術品および工芸品、つまり、タンカ（仏画）thang ga、グイタン（堆繡）アププリケ gos grub、デプリ（壁画）ldebris、サウドウ（刺繡）gtsags grub、バウゾ（土偶）'bag bzo、ヒャンゴウ（木彫）shing brko、マルジャン（バター細工）mar rgyanなどの芸術を総称してレプコン芸術という。

レプコン芸術は、チベットの代表的文化大系「チベット学十学科 rig gnas bcu」（総称「十明」）のうちの一つであるゾリパー（工巧明）bzo rig paに含まれ、チベットの歴史、仏教、文化に深く結びつき、何世代にもわたって発展してきた。主に14～15世紀以来、レプコン地域のロンウ・グチュ（隆務川）rong bo dgu chuの両側に点在しているセンゲション（吾屯）村 seng ge gshong sde ba とニェント（年都乎）村 gnyan thog sde ba、ゴマ

ル（郭麻日）村 sgo dmar sde ba、ガサル（尕撒日）村 rka gsar sde ba 及びワオツコル（脱加）村 bod skor sde ba などを中心として発展してきた。これらの村々は多数の工芸家を輩出し、インド、ネパール、中国内陸部などから新たな工芸技術を導入しながら、チベット仏教芸術の中心地として栄えた。現在でも、これらの村々男性の7～8割はなんらかの伝統芸術を継承する工芸職人である。制作には農閑期が主にあてられ、市場経済の発展とともに重要な現金収入の道となっている。

近年、中国の西部大開発の政策と2006年7月1日の青海チベット鉄道の開通により、青海省の観光客が急増した。特にレプコン芸術は2006年6月に中国の第1次「国家指定非物質文化遺産」に定められ、2009年9月にユネスコの「世界無形文化遺産」に登録された。一方、非物質文化の指定と観光化の影響によりタンカの値段が高騰し、反比例して質が下がるなどの問題が出現している。

本稿では、まず、青海省における非物質文化遺産の状況を概観し、その後タンカを中心として「レプコン芸術」の形成と分布、タンカ制作の過程、更に無形文化遺産へ登録と登録後の動態などについて述べたい。

## 2 青海省における非物質文化遺産の状況

青海省は中国の西部に位置し、チベット高原の東北部を占める。チベットの行政区分のうち主にアムド地方に属するが、青海省東南部のジェクンド（玉樹）一帯はカム Khams 地方に属する。歴史上この地域は、古代の遊牧民族である羌族の居住地であった。紀元前2世紀から紀元前1世紀にかけて、前漢がアムド東部を平定し、西寧に軍事拠点をおいた。唐代は吐蕃王国の領土となり、13世紀の元代には吐蕃等处蕃宣慰使司を設置し、元が吐蕃諸族を統括した。明代には土司制度が敷かれ、西蕃地となる。この地が「中華帝国」の直接支配下に入ったのは清代に入ってからのもので、元・明の土司制度を踏襲し、西寧府が設置された。1929年に青海省となり、省都は西寧市に置かれた。

青海省は、甘肅省及び四川省、チベット自治区、新疆ウイグル自治区に隣接しており、長江、黄河、メコン河の源があることにより「三本の河の源」と称されている。東西1,200キロメートル、南北800キロメートル、総面積は72.12万平方キロメートルで、日本列島の約2倍である。中国の各省、自治区の中で4位の土地面積を占めている。青海省の大部分は「世界の屋根」といわれる青海・チベット高原にあり、同省の平均標高は3,000メートルである。総人口は554.3万人、そのうち少数民族の人口は2007年現在、240万5130余人で、同省総人口の46.32%を占めている。おもな少数民族はチベット族、回族、土族、<sup>トッ</sup>サラール族、モンゴル族などであり<sup>2)</sup>。多民族の宗教と文化が併存しており、全国で人口が最も少ない省の1つである。省内の行政区分は、西寧市と海東地区（漢族と回族の多くはここに分布する）、6つの自治州（海南チベット族自治州、海西モンゴル

族チベット族自治州、海北チベット族自治州、黄南チベット族自治州、果洛チベット族自治州、玉樹チベット族自治州）で構成されている。

青海省には2008年の時点では全国重点文物保护单位（国家指定重要文化財に相当）が18ヶ所、青海省指定重点文物保护单位は383ヶ所がある<sup>3)</sup>。2015年までに73の国家非物質文化（そのうちチベット族関係は41、土族9、サラール族5、モンゴル族3、回族2、漢族10、総合3を占める）が指定されている。代表的な国家非物質文化遺産の継承人は40人である。青海省レベルの非物質文化遺産86ヶ所、代表的な非物質文化遺産の継承人159人である。また、2009年に「レブコン芸術」が青海省で唯一初の「世界無形文化遺産」に登録され、さらに、ほかの省との共通項目としてチベットの英雄史詩「ケサル」と「チベットの芝居」、「花児」などがユネスコの「世界無形文化遺産」に登録された<sup>4)</sup>。

### 3 同仁県のレブコン芸術

同仁県（チベット語でམེན་ཁོང་Reb kong レブコン・熱貢）は青海省の東部に位置し、チベット文化圏の中でもほぼ東端に相当する。dKon mchog bstan pa rab rgyas (1982) によるとレブコン（同仁）地域の一部の祖先は秦漢の時代の西羌部族から発展変化してきたと記述され、住民の一部は吐蕃王国時代の吐蕃軍の後裔であるとされている。「レブコンのガルセ（瓜什則）3村とセールワツムト部族は吐蕃王国の大臣ガル・トンツェンの属民で、ロンウ（隆務）7村とロンチェ部族は元代にチベットのツァキャ派政権が派遣したアニ・ラジェと息子のロンチンドディブン氏と関連があり、サチェ村はラサ北部のタロンタン地方から移動してきた」[Blo bzang mkhyen rab 2005: 11]。「紀元310年頃今のレブコン地域は一時期吐谷渾に統治されたが、670年には吐蕃王国の勢力により滅亡した。その後、レブコン地域は唐と吐蕃との係争地になり、安史の乱の折り、吐蕃軍が東に進攻し、レブコン地域は完全に吐蕃軍の軍事要地になった」[黄南藏族自治州概況編写組 2008: 79]。

元代の13世紀、モンゴル軍がチベット高原を支配し、隆務河流域に吐蕃等処蕃宣慰使司を設置して吐蕃諸族を統括した [黄南藏族自治州概況編写組 2008: 80]。モンゴル軍の勢力の増大に伴って数多くのモンゴル族が隆務河流域に転入し、現地において民族間での融合や変容が始まった。

新中国が成立した時に「土族」と識別された中世モンゴル語の一種を話す土族の村が同仁県内に4つあり、それらがレブコン芸術の中心地である。レブコン地域に関してはロンウ・ゴンパ Rong bo dgon pa (隆務寺) の歴史文献では「昔から、黒色テントに居住する一万の部族、白色テントに居住する1万の部族、灰色屋根の1万の部族、周辺の下域から来た漢族の千の部族、北方モンゴルから来た千の部族、チベットの後藏ラドから来たハディ Lha sde (絵師) の部族」[Jigs med theg mchog 1988: 30] と述べられている。

この史料からは黒と白のテントに暮らす遊牧民と灰色屋根で暮らす農民などレプコン地方は昔から半農半牧の多民族が共生している地域であり、絵師らの祖先はLha sa ラサから来たことが推測できる。

現行の行政区画としては、同仁県は青海省の省都である西寧市の真南にある。黄南チベット族自治州の州都の所在地でもあり、総面積は3,275平方キロメートルである。宗教的には同仁地域を含めてアムドのほとんどのチベット人がチベット仏教ゲルク派を信仰しているが、仏教伝来以前からの宗教であるボン教 Bon po や、ニンマ派 sNying ma の信者もいる。隆務の町の中には今も僧侶600人あまりを有するゲルク派の名刹—隆務寺がある。

同仁県の東は甘粛省のツァンチュ（夏河）県、南は同州の澤庫県、西は海南チベット族自治州のチュカ（貴徳）県、北は同州チェンツァ（尖札）県、海東地区の化隆回族自治县、循化サラル族自治县などに隣接している。同仁県は2つの鎮と10の郷、72の行政村、4の「社区（居住地）」で構成されており、総世帯は20,877戸で、総人口は79,115人である。そのうち遊牧民と農民は合わせて11,378戸で60,229人である。チベット族の他に漢族、回族、土族、サラル族、保安族、<sup>ゴワン</sup>モンゴル族などの多民族が集居している。そのうちチベット族は73%を占めている」[黄南蔵族自治州概況編写組 2008: 61]。

同仁県はチベット語で རེབ་གོང་རིག་པ་འབྲུང་པའི་གྲོང་ཁྱེར་ Reb gong rig pa 'byung ba'i grong khyer レプコン・ルフバジヨイ・ドゥチュエル（知識人の源という意味）と言われているように歴代多くの知識人が生まれた土地である。元代にこの地域を統治したレプコン政教合一政権である Rong bo nang so ロンウ・ナンツォの歴代首領たちと、アムドで第3番目に大きい仏教名刹—隆務寺の最高位の転生ラマ、歴代 Shar bla ma skal ldan rgya mtsho シャルラマ・ガルデンジャツォ、また、チベット仏教ゲルク派の創立者の rJe tsong kha ba ツォンカバの師であった Chos rje don grub rin chen チジェドントフ・リンポチェ、20世紀のチベットの賢者と称されるゲンドウンチュンベルなどがこの地域の出身者である。

また、「Reb gong gser mo ljongs レプコン・セルモジョン（金色の谷）」と言われているように Sha brang シャルダン銀山と gser khog セルコック金山などの鉱山に囲まれている。中国の歴史文献などでレプコンは漢語で唐代は楡谷、明清代に捏工 [馬 2003: 4]、現在は熱貢（同仁）と書かれている。

この地で発達した美術品および工芸品のタンカ（仏画）、堆繡、壁画、刺繡、土偶、木彫、バター細工などの芸術を総称して「レプコン芸術」ともいう。「レプコン芸術」は80年代までは「センゲション芸術」と呼ばれ、80年代以降青海省で発行した『青海群衆芸術』などで初めて「レプコン芸術」として登場した。センゲション上村と下村がこの地域の中心で、それに次ぐのは順番にニュント村とガサル村、ゴマル村、ウォッコル村である。1929年の同仁県成立までは今の澤庫県全地域もレプコンに入っていた。この地域は歴史上、唐と吐蕃の戦地あるいは両国の曖昧な国境線であったため、多民族の交流や

変容の痕跡がみられる。レプコン芸術の発祥地である上記の村々では土族語とチベット語の両方で交流できる。レプコン芸術の美術工芸技術以外にルロ祭とチベット芝居、トーテム信仰、民謡などの伝統文化も残されている。

レプコン芸術は、14～15世紀以来、チベットの歴史、仏教、文化に深く結びつき何世代にもわたって発展してきた。これらの村々は多数の工芸家を輩出し、インド、ネパール、中国内陸部などから新たな工芸技術を導入しながら、チベット仏教芸術の中心地として栄えた。現在でも、これらの村々男性の7～8割はなんらかの伝統芸術を継承する工芸職人である。



図1 黄南チベット族自治州と同仁県

## 4 レプコン芸術の形成と発展

### 4.1 レプコン芸術の形成

広義のレプコン芸術とはタンカ（仏画）、堆繡、壁画、刺繡、土像、木彫、バター細工などを含めた芸術の総称で、狭義のレプコン芸術とは一般にタンカ（仏画、中国語で「唐卡」）のことを指しており、壁画と刺繡、堆繡も含めている。本稿では取り上げるタンカは後者である。チベット語でタンは広い空間、カは空白を埋めることであるから、僧院の壁や天井などに仏像やマンダラ、吉祥の文様などを描いて埋める意味である。

チベットのタンカはBye'u sngang ba シェウガンワ流と sman thang ba マンタンワ流、mKhyen brtse ba キャエンセワ流、sgar ガル流、sman gsar マンサル流、sK'gyur ra lha chen ジュルラハチン流など技法に基づく流派が多いが、レプコンのタンカはマンタン流である [Brugthar 2005]。

主に仏教の仏像や護法神などをテーマとしている。チベットに仏教が入って来た時、チベットの殆どは広大な草原に暮らす遊牧民であり、季節移動する際、遊牧民の便利を図って持ちやすい巻物の仏像を造ったことに由来するという。

チベット人は絵師をハリバ（仏を描く人あるいは神格の人の意味）とハゾ（建仏人の意味）と言われている。

チベットのタンカの歴史は長く、2,000年前、すなわち仏教伝来以前からその技術は発達しているという。吐蕃王国建国伝説によると紀元前200年頃初代のニャティツァンポ王がチベットで最初の宮殿—ユブラカンを建築した際、ニャティツァンポが天から降りてきて人間の王になった様子を壁画に描いたという<sup>5)</sup>。当時は、神々の神像を岩壁などに描いて信仰し、その後、ボン教の創立者のトンパ・シェラプがシカや山羊など供犠の代わりにそれらの動物の像を木の皮などに描き、それを燃やして儀礼を行うようにしたという。

吐蕃王国のソンツァンガムポ王の時代7世紀にインドから仏教が伝来し、その時、王が中国やインド、ネパールなどの周辺の国や地域から優れた美術工芸師を招き、ラサのJo khang 大昭寺とRwa mo che 小昭寺などを建築した。寺院の壁画にはチベットの代表的な故事や大昭寺の建築史、文成公主が唐から嫁に来た時の歓迎図、それにチベットの芝居や運動会などの風景をチベット流に描いた。ソンツァンガムポ王自身もタンカを学び、自分の鼻血で護法女神を描いたという。また、僧院の知識人や僧侶が仏教原理やチベットの天文学、医学などを教えた時、今日のポスターのように用いたものとも考えられている。

その後、8世紀のティソンデツァン王のとき、仏教を国教に指定し、チベット史上初の僧院—サムエ寺を建て、貴族の少年7人を選び僧侶にした。その一方でインドから数多くの仏教学者を招待し、大量の仏教経典をチベット語に翻訳した。当時、チベット全地域に優れた美術工芸師が輩出し、仏教を普及させる重要な手段として、各地域に寺院や仏塔、仏像、仏画などをチベット人が受け入れ易い形で造った。また、9世紀のティラルパチン王の時、タンカの技術は一段と向上し、中国や、敦煌などのオアシス国家や地域との交流が盛んになり、周辺の国々の技術を吸収したという。この時代につくられた壁画と仏像、岩彫などが多く残されている。

レプコン芸術はdBus gtsang ウ・ツァン（中央チベット）の影響が強く、また周辺の他民族や敦煌文化などの影響を受け、レプコン独特の工芸技術ができたと考えられる。その由来についてはいくつかの伝説がある。

有力なものは、①吐蕃に由来するというものである。レブコンを含むこの地域では前述のように7世紀から8世紀にかけて唐と吐蕃の間に頻繁に戦争が起こった。中央チベットから来た吐蕃辺境軍の中には絵師のグループがおり、唐と吐蕃が平和的に調停した後、吐蕃軍の一部の兵士がウ・ツァンに戻らず、地元の人と結婚し、タンカの技術をレブコン地域に伝播したという。②元の時代、国師ドゥゴン・パツクバ（八思巴）がロンチンラジェ・タウナワをレブコンのナンツォ政権に派遣した際、ウ・ツァン（中央チベット）からレブコン地域にロンチンラジェ・タウナワと共に絵師と木彫師、石彫師ら300人あまりが同行して来た。その時、ラサから仏像や仏塔などティッサ（技法）の書を持参してきた。その後、ロンウ・ナンツォ政権の宮殿を建てる際、漢地から大工と彫塑師、北方モンゴルから石彫師、中央チベットのラサから絵師を招聘し、1年間で完成させたという。また、ロンチンラジェ・タウナワはレブコン地域でチベット仏教を布教するため、僧院の建築や仏像作りなどを進めた。その後、1301年にツァキャ派のサムタン・リンチンとロティー・ツングイ両氏を中心になってロンウ寺を建てた時、センゲシヨンのウイパ・ダルジとクンキャブなどの絵師を中心にして、数多くの壁画や仏像、タンカなどが造られた。当時の作品は今なおレブコン芸術研究の重要な資料となっている。さらに、アムドのタシキェ僧院を建築した際、中央チベットから絵師や木彫師、石彫師など招待し、デチンツァンガウカルピツペー絵師を中心にしてニェントガジュワとツァンラリパー、ガサルシャンチュラブサルなど優れた絵師が輩出し、タンカを普及させた[rDo rje rgyal 2011]。

以上のように、14世紀になるとこの地域にチベット仏教が広範囲に普及したが、15世紀以降にはツァキャ派に加えて、ゲルク派も台頭し、各地に僧院建築が更に発展し、タンカなどの需要が拡大した。また、地理的にはチベットゲルク派の6大寺院の1つであるラプラン（拉卜楞）寺とグンブン（塔尔）寺と近く、さらにレブコン地域のロンウ（隆務）寺があって、美術品の流通販売の環境も良かったと考えられる。



写真1 絵師とタンカ

## 4.2 レプコン芸術の交流と発展

1348年にレプコンの絵師らがレプコン地域から離れて北京などでの寺院と仏塔の建築に参加した。その時、元代の恵宗帝は「チベットの技術はネパールより優れており、このような素晴らしい作品は初めて見た」と称賛した。また1403年に明の永楽帝はレプコンの絵師らを招き、北京でインド風の仏塔を建てたが、そのおりも永楽帝は「チベット独特の工芸技術は最高級である」と賛美した文を送った<sup>6)</sup>。1427年にレプコン地域のロンウ・ナンツォ首領と高僧が北京で永楽帝に謁見した際、皇帝から「君たちの地方には優秀な絵師団がおり、その名声は各地に広がっている、引き続きよく育てよ」という指示を受け、皇帝から大量なタンカの顔料を授かった [Tshe dbang rdo rje 2009: 72-73] という。1579年にレプコンの絵師らが五台山の神廟と白塔などの建築に参加したが、一部の絵師は暑さに耐えられず、亡くなった。生き残られた絵師らには明代の万暦帝から褒賞と中国各地への「通行優先聖旨」が与えられたという。さらに、1651年の年末に清代の順治帝がセンゲシヨ村の絵師らを北京に招き、北京の五門廟と北海永安寺の白塔の建築に参加し、その後、1712年にも清の康熙帝がレプコンの絵師ら北京に招き、仏教僧院の建築に参加し、完成後、清帝から「褒賞」を与えた [rDo rje rgyal 2011: 528] という。元代から清代にかけて、チベット仏教が中国内陸部に流入し、レプコンの絵師らの工芸技術を各皇帝が認め、レプコン絵師らが中国内陸部の僧院建築や絵師らの交流が盛んに行われて来たことを考えられる。それで、今もなお、北京の雍和宮や五台山などの仏教寺院に当時のタンカが残されているのである。それ以外に中央チベットのラサとシガツェ、カム、インド、ネパールなどの地域と国にもレプコン絵師らのタンカが多く残されている。

20世紀になるとレプコン出身のゲンドウンチュンベル (1905~1951) とアムドシャムパ (1913~2001) は伝統的ティッサ (度量技法書) を超えて、リアリズムの仏画を描くようになったが、当初は伝統的宗教色が濃いチベット社会や貴族から受け入れられず、批判の対象になり、2人とも僧侶でありながら僧院に居場所がなくなり、還俗した。ゲンドウンチュンベルはダライラマ13世の肖像を描いて有名になり、その後、インドやネパールなどを訪れ、数多くの作品を残した。特に彼はネパール王の肖像を描き、好評を得たが、チベットに帰ってのち40代の若さで亡くなった。アムドシャムパの作品の特徴は、実在した人物を中心に、人格化した釈迦や菩薩、歴代チベットの王、それにダライラマとパンチンラマなど高位転生ラマを中心とした絵は有名である。そのため、ダライラマ14世の絵師となり、1954年に北京で開かれた中国人民代表大会の際、彼が描いた毛沢東主席の肖像をダライラマ法王が中央政府に贈与した。また、20世紀の40年代にセンゲシヨ村出身のシャウツェラン絵師が漢族の絵師張大千とともに敦煌へ赴き、敦煌の仏像や仏画などの復元に努めた [rDo rje rgyal 2011: 529] という。

以上のように、元代から各帝が「レプコン芸術」を高く評価され、北京から遠く離れ

ているレブコン地域の絵師を招き、僧院の建築に力を注ぎ、漢族の絵師とレブコンの絵師らの間の交流が盛んに行なったことが明らかである。

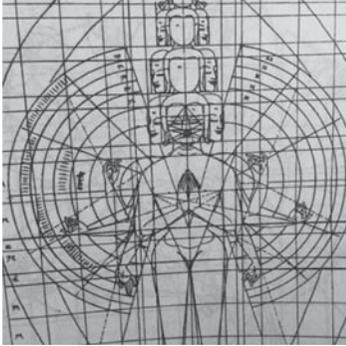


写真2 伝統的ティッサ



写真3 人格化した歴代チベットの王のタンカ

## 5 文革後の復興

### 5.1 文革後レブコン美術館の設立

現在、同仁県隆務鎮にあるレブコン美術館は青海省で唯一の芸術研究所である。その発足の歴史を概観すると、新中国成立後の1958年から青海省と黄南州政府関係が民間の工芸家を集め、約80点の作品を完成させ、その内42点あまりの作品が中国美術家協会から高い評価を得て印刷出版された。1960年代の初期になると「人民画報」が初めて「レブコン芸術」を紹介し、青海省人民政府がレブコン芸術の調査団を派遣した。レブコン芸術の生産、発展、特徴などについて資料を集めた。文化大革命の時期はレブコン芸術もその反撃から免れず、大量の仏像やタンカなどの作品が破壊され、数多くの工芸伝承者が投獄された。文革後の1979年10月に美術専門家と民間の工芸家を中心にレブコン芸術を継承するために同仁県隆務鎮でレブコン芸術研究組が成立した。1980年にチベット仏教の指導者で当時、國務副委員長であったパンチンラマ10世がレブコンを視察し、レブコン美術館を訪れた際、「レブコン芸術の復旧を速やかに」という指示をした [rDo rje rgyal 2011: 529]。その後、センゲション村絵師らが「ケサル大王伝」と「文成公主の入蔵」などの優秀な作品を完成させ、1981年8月に北京と上海、西寧市などで展覧会を開き、レブコン芸術は美術界と学術界の「青藏高原の花」という高い評価を得た<sup>7)</sup>。

1982年にセンゲション村出身の長老工芸家らが中心になって同仁県でセンゲション芸術研究所を造った。その後、青海省文学芸術協会と黄南藏族自治州文化局の協力を得て、レブコン芸術の復旧と発掘、整理などを中心として1985年6月に黄南州レブコン美術館とその中にレブコン芸術研究所が成立した。1986年6月に当時の国家総書記であった胡躍邦が黄南州を視察した際、当館を訪れ、「熱貢美術館」という題辞を書き、「必ず優秀

なレプコン芸術を発展させるよう」<sup>8)</sup>指示した。それをきっかけとして州政府がレプコン芸術を発展させるために大量の基金と人材を投入し、レプコン芸術の普及や宣伝を強化した。年配の工芸家らが中心にレプコン芸術に関心がある若者の工芸家を育て、数百点の工芸品を広州、天津、上海など中国国内の展覧会で展示した。なかでも近年有名な工芸家はセンゲシヨ村のシャウツェラン（1922～2004年）とガサル村のグンザン（1920～1996年）である。彼らはレプコン芸術館準備委員会の委員と館の職員、中国工芸美術協会青海分会の常務理事などを勤めながら、一生の間に優れた工芸品約4,000点あまりをこの世に残した。シャウツェラン絵師のタンカ「天王の八匹の馬」は国家級の賞を受賞し、「中国工芸美術大師」の名誉を与えられた。



写真4 レプコン芸術館



写真5 中国工芸美術大師シャウツェラン

## 5.2 世界で一番長いタンカ「藏族文化彩繪大観」の完成

チベットの長い歴史と文化、独特な仏教芸術などを集結したレプコン芸術の代表的大作を創出するために、ソディラプジ絵師が中心になって、長年にわたって企画した世界で一番長いタンカ「藏族文化彩繪大観」（1999年）を完成させた。彼は30年にわたってチベット伝統タンカと現代の油絵など学び、1980年代からインドやネパール、ブータン、イギリス、アメリカ、中国の内陸部などを訪れ、画家や学者、転生ラマなどと交流を行った。1996年5月からレプコンを中心とし、青海省、甘肅省、雲南省、四川省、チベット自治区などの各地域から優れた絵師300人余りを招聘し、レプコンの中心である隆務鎮で描き始め、3年後の1999年9月に完成した。絵師のなかで一番若いのは13歳、最高齢は90歳である。タンカは長さ618m、幅2.5m、面積は1,500m<sup>2</sup>、重さ1,000kgである [brTson 'grus rab rgyas 2007]。

内容は4部で構成されており、第1部はチベットの吉祥文様などの図案と第2部は地球と生命、人類の由来などチベット人の世界観と歴史。第3部はチベット仏教の歴史と発展、釈迦様伝、各宗派創立者と転生ラマ、大学者など。第4部はチベットの科学、医

学、芸術、天文学、哲学などであり、主にチベットの歴史、文化、宗教、芸術、民俗生活などをタンカに描いた前例のない百科事典でもある。完成後、世界から注目を浴び、1999年12月3日に「ギネス世界記録・世界で一番長いタンカ」として登録された。その後、北京とラサ、西寧、韓国などで展示を行い、レブコン芸術を国内外に宣伝した。現在は青海省西寧市にある青海省チベット文化博物館で展示されている。この「藏族文化彩絵大観」はレブコン芸術を世界に宣伝する役割を果たし、後の「世界無形文化遺産」への登録に貢献したと考えられる。



写真6 世界で一番長いタンカ「藏族文化彩絵大観」

## 6 絵師とタンカの作成過程

### 6.1 絵師

レブコン地方では今日でも仏教以前からのボン教や仏教ニンマ派の信者もいるため、昔からのボン教の僧院とニンマ派の僧院があるが、仏教ゲルク派の信者が圧倒的が多い。この地方にはゲルク派の大僧院——ロンウ寺と35の属寺があり、各村は僧院を所有している。僧院以外に各村落には yul lha gzhi bdag 土着信仰の神々を祀っている dmag dpon khang マホンカン廟と ma Ni khang マネカン（日本風にいうと念仏堂）があり、各家には mchod khang 仏間が置かれている。これらの宗教施設には自分の信仰に基づき、それぞれボン教の神々と仏教の仏像、修行者、護法神、転生ラマ（高僧）、土着神などのタンカを飾っており、毎日のように礼拝する。かつて、この地域の僧院はタンカや伝統医学、哲学などの大学であり、各家から1人か2人の男の子を7～8歳になったら僧院へ送り、僧院で系統的にチベット語や経文、タンカなどを勉強させていた。当時は十数年間にわたってすべての絵師の専門知識を身に付け、出身僧院と周辺のチベット地域へ出稼ぎに出ていた。

特にセンゲション村のほとんどの村人は絵師で、各家には画室を持っている。伝承は父子相伝か、僧院の絵師に学ぶという方法がとられるが、現在はそのうえに、新たに「タンカ工房」と「タンカ画院」、「タンカ関係の職業学校」などが出現しつつある。

次に、センゲション村とウォッコル村のいくつかの絵師の事例を見てみよう。

事例1. ニャンブン絵師、1971年レプコン・センゲション上村の生まれ、12歳から当村の有名なシャウツェラン絵師の弟子になり、1997～1998年に前述の「藏族文化彩絵大観」制作のメンバーに入り、タンカの技能に優れた人物と評価された。その後、「青海省工芸美術大師」および「中国工芸美術大師」、「中国非物質文化遺産传承人」、「中国タンカ大師」などの称号を得た。2006年8月1日に個人の投資で「レプコン画院」を創り、今までに180人余りの絵師を育成した。画院は展示部と研修部、制作部、収蔵部、販売および営業部などで構成されており、彼の作品「文成公主」や「新中国の成立」、「北京オリンピック」などは国から高い評価を得、特に彼の作品「釈迦」のタンカは国家博物館に収蔵された。

事例2. ロプザン絵師。1981年センゲション下村で生まれ、小さい頃から当村の僧侶になり、僧院の絵師からタンカを学んだ。現在は2人の弟子にタンカを教えながら、僧院の僧房でタンカを描いている。

事例3. ダルジェ絵師。1970年出身センゲション下村の僧侶になり、17歳から僧院で9年間をかけてタンカを学び、絵師になった。還俗後、五台山とタル寺、ラサなどの僧院でタンカ数百枚を描いた。

事例4. リシャンツェラン絵師。1976年にウォッコル村で生まれ、6歳で当村の僧院の僧侶になり、チベット語と仏典を勉強しながらガサル村の有名なグンザン絵師、ソナム絵師、シャバジャ絵師らからタンカを学んだ。タンカの技能が優れているとして1997～1998年に「藏族文化彩絵大観」制作のメンバーに入った。2001年から雲南省迪慶族自治州のガルデン寺と四川省の各チベット僧院、大学などで数多くのタンカを制作した。彼の作品「四天王」、「天文暦算」、「五大護法神」、「四部医典」は西南民族大学の博物館に収蔵され、州政府の「レプコン芸術の家」「レプコン芸術の特別貢献賞」を受賞した。

事例5. ユルベ絵師。1982年にウォッコル村で生まれ、10歳に僧侶となったが、家族の影響を受け、父親と兄からタンカを学び19歳の時還俗した。今は当村でタンカを描きながら、工房で数十人の弟子らにタンカを教えている。

事例6. ドルジェ絵師。1980年にウォッコル村で生まれ、中学を中退し、親戚の絵師からタンカを学んだ。2004年にタイに出国し、タイの仏教寺院で8年余りの間にタンカを作製し、高い評価を得た。帰国後ウォッコル村で自分のタンカ工房を創り、十数人の弟子にタンカを教えながら新作品を描いている。

以上のようにほとんどの絵師の出身は僧侶、還俗者あるいは小中学校を中退した者で、今日でもタンカの伝承は父子相伝か、親戚伝承、僧院の絵師に学ぶという伝統的方法を維持する。一方、新たに学ぶ場として「タンカ工房」と「レプコン画院」などが出現しつつある。また、絵師らが五台山と四川省、雲南省など周辺の地域や国へ出稼ぎに出て、交流が盛んに行われていることが明らかである。



写真7 タンカ工房



写真8 レブコン画院

## 6.2 タンカの種類と制作のプロセス

以下ではタンカの種類と制作のプロセスについて簡単に述べる。

前述したチベット語でハズといわれる絵師というのは刺繍、堆繡、壁画など含むすべてのタンカ制作者に対して使われている。タンカの種類には tshon thang ツォンタン（彩絵）と dmar thang マルタン（赤絵）、Ser thang ツェルタン（黄絵）、Nag thang ナウタン（黒絵）、lDeb ris デプリ（壁画）、Gos grub グイタン（堆繡）、gtsags grub サウドウ（刺繡）などがある。

ツォンタンとマルタン、ツェルタン、ナウタン、デプリなどの技術はセンゲション上、下の両村が優れており、グイタンとサウドウの技術はニェント村が有名である。絵師らは信者の需要に応じて制作する。

制作手順： タンカの大小はいろいろあるが、絵師は依頼者や描く人物に応じて布や革、紙、壁、木板など絵を描く画材と大きさを決める。ほとんどの場合は綿布を使うため、以下では綿布の例を挙げる。

### (1) まずは Ras gzhi brdar ba リシュダルワ（綿布加工）作業

綿布をきれいな水につけて木製の枠に綿布を平坦にぴったり貼る。その後、糸で綿布の周囲を木製の枠にしっかりと縛り付ける。そして、膠にツーホジィ（胡粉）を合わせた物を布の表面と裏に厚すぎず、薄すぎず適度に塗る。最後に少し乾かし均一に光沢が出るように、専用の石でこする。

### (2) thig rtsa ティッサあるいは sKya thig キャットウ（設計図）を描く

ティッサとは絵師らが基本的に守らなければならない技法であり、タンカを学ぶ人にとって最初の基本的な入門科目でもある。基本尺度と製図線を含む全体の構図であり、制定された神像や仏像、高僧など人物の形像の法則である。例えば、神々の乗り物や持ち物、衣服などは厳格にティッサに定められている。絵師は出来上がったリシュ（加工した布）に基本的ティッサを超えないように人物を描く。

### (3) tshon rgyag pa (ツォンジャフパ) 色を塗る

描く人物の形像と色彩の要求によって決まる。色の種類は非常に多く、ほとんどの顔料は金、銀、珊瑚、トルコ石などの鉱物と植物などの天然物であるため、長年保存できる。色の組み合わせにそれぞれ特徴がある。ツォンタン（彩絵）とマルタン（赤絵）、ツェルタン（黄絵）、ナウタン（黒絵）など必要に応じて顔料を塗る。マルタン（赤絵）の場合は赤を基本の色として、その上に金色で線を引いて完成させる。ツェルタンの場合は黄色の布に赤い線で描く、ナウタン場合は黒色の布に金線で描くのが特徴である。

### (4) Gong zhabs ゴンシャップあるいは zhabs glegs シャプラフ（タンカの表装）

絵師あるいは村の専門的裁縫技術を持つ者がタンカの色や大きさなどに合わせて布やシルクなどの織物で、書画の軸装のようなタンカの表装を行う。一般的には堆繡技術の一つであるため、堆繡が盛んなニュート村にはこの表装技術を持つ者が一番多い。

以上のようにタンカ制作のプロセスが複雑で、顔料と画材は金と銀、珊瑚、トルコ石、蔵赤花などの鉱物と植物であり、画法が精密で美しい、彩色が鮮やか、造形が生き生きとしており、立体感が富んでいるのは特徴的である。

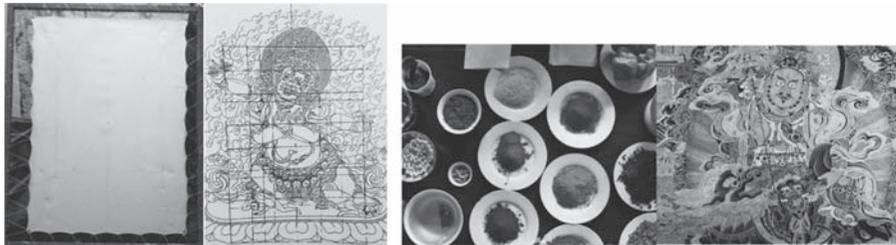


写真9 制作のプロセス

## 7 無形文化遺産への登録とその後の動態

### 7.1 無形文化遺産への登録

中国では1960年代から各県および州、省、国のレベルで歴史遺跡や僧院などの物質文化に関して「重点文物保護単位（指定文化財に相当）」への指定を実施し、有形の物をある程度保護してきたが、非物質文化に関する保護の取り組みは、ユネスコや国外の動きにともなって、21世紀に入ってから始まった。

ユネスコの無形文化遺産に関する具体的な活動は、1998年に採択された「人類の口承及び無形遺産の傑作の宣言」の規約に始まる。それに基づき、2001年から2005年までに3回に分けて90件の傑作の選定があったが、中国からは第1回で「昆劇」、第2回で「中国の伝統音楽」、第3回で「新疆ウイグル族の音楽芸術ムカム」がリストに入り、中国での無形文化に関する保護の意識に影響を与えた。2003年の第32回ユネスコ総会で「無形

文化遺産の保護に関する条約」が採択されると、中国は2004年に締結している。その後、締約国が30か国に達し、同条約は2006年4月に発効したが、2011年5月現在世界の136か国が締約している。「無形文化遺産の保護に関する条約」の第2条では、「無形文化遺産とは、慣習、描写、表現、知識及び技術並びにそれらに関連する器具、物品、加工品及び文化的空間であって、社会、集団及び場合によっては個人が自己の文化遺産の一部として認めるものをいう<sup>9)</sup>と定義している。

中国では2003年から「中国民族民間文化保護プロジェクト」を稼働させ、民間文化の調査および整理、記録などを行った。その後、2005年に国務院が「非物質文化遺産保護法」を実施し、2006年に中国初の国家レベルの非物質文化遺産代表リストを公表した。

中国では、文化遺産を物質文化と非物質文化に分けている。文化遺産と自然遺産が有形的、物質的であることに対して、無形の文化財は非物質文化遺産と称されている。中国の非物質文化とは、『中国非物質文化遺産普查手冊』によると「各民族が代々に継承し、人々の生活と緊密に関わる各種の伝統文化の表現の形式（民俗活動、演劇、芸術、伝統的知識と技能、およびそれと関わる器具、実物、工芸品など）と文化的空間（定期的に行う伝統文化の活動あるいは集中的伝統文化を表す場所、空間性と時間性を備える）を指す」と定義されている。具体的に民間文学と民間音楽、民間舞踊、伝統的美術、伝統的技能、伝統的芝居と曲技、伝統的体育、遊技と雑劇、民俗などの9種類に分類されている。

青海省では多民族、多文化が併存しているため、各民族の「国家非物質文化遺産」への登録申請の種類が一番多い地域であり、その中ではレプコン地域の各レベルの「非物質文化遺産」登録の割合が多い。同仁県は1994年に中国で99の「中国歴史文化名城」の1つに指定され、2000年3月中国西部大開発戦略が実施された。当時は中国一番の貧困県の1つとして認定されているが、中国政府の第11次五ヶ年計画のもと青海省を含め西部の辺境地域では、自動車道路の建設による交通網の整備により、田舎の村や山中の寺院まで車が進入できるようになった。特に2001年8月に第1次「レプコン芸術祭」を開催し、地元政府がレプコン文化をアピールし、観光業を発展させよう努力した。2006年に県と州が「レプコン芸術」を中国の第1次「非物質文化遺産」登録への申請を行い、最後に青海省からの推薦を受け、中国の第1次「非物質文化遺産」に認定された。その後、国や省文化局から数多くの絵師に「非物質文化継承者」と「工芸美術大師」、「芸術之家」などの名声が与えられた。更に、2006年から黄南州政府が「文化観光業で収入を増やし、地方経済を再生する」というスローガンを打ち出した。政府がチームを組んで民間文化に関する調査を実施し、レプコン地域の「非物質文化遺産」と「遺跡」のデータ化が進み、「青海熱貢文化産業の発展企画」と「同仁県歴史文化名城の保護と修復」、「青海隆務寺の保護に関する企画」、「国家レベル熱貢文化生態保護実験区の総体企画」、「黄南州旅行発展に関する総体的企画」などを発行した。2010年の時点で黄南州に4,000

人余りのレプコン芸術工芸人がおり、その内6人が「国家レベルの非物質文化遺産伝承人」に指定され、5人が「中国工芸美術大師」、17人が「青海省工芸美術大師」に指定されている。また、レプコン研究の学者らへ依頼し『神秘的熱貢文化』、『レプコン芸術』、『同仁——レプコン芸術の故郷・中国歴史文化名城』、『黃南秘境』などの書籍を出版した<sup>10)</sup>。2009年10月「レプコン芸術」と「チベットの芝居」、「ケサル詩史」が正式にユネスコの「人類の無形文化遺産」に登録され、日本でも2014年9月26日から10月19日にかけて日中友好会館美術館で「印象青海——タンカ美術展」を行い、青海省レプコンから来日した絵師によるタンカ約35点と刺繍、織物、(堆繍) アップリケなどが展示された<sup>11)</sup>。

## 7.2 無形文化遺産に登録後の動態

本来は政府の意図としては非物質文化遺産或いは無形文化遺産への登録によりある民族の伝統文化や芸能を人類の遺産として認め、政府から保護しようとする動きである。しかし、登録後、タンカの知名度が高まり、観光に来る人が増えた。それを原因として伝統的タンカの質が下がる一方その値段が高騰するなどの傾向が見られる。

絵師になる者は1958年以前まではほとんどセンゲション村を中心とした僧侶であったが、1958年以後の民主改革により僧侶は還俗し、村に戻り、一般の村人までに広がった。村人は副業として農閑期に絵を描く。絵師は男性に限られ、女性は仏画を描くことは許されなかった。正式にタンカを描けるようになるまで10年以上の勉強が必要で、描く前の修行儀礼や描く時のタブー、完成後の読経儀礼などのこだわりが多く、描く目的は金銭のみではなく仏教信仰の功德を積むためでもあった。以前はほとんどのタンカの依頼者は仏教徒であるため、装飾品ではなく寺院などに奉納するためであった。絵師は心の訓練も必要であった。

2006年7月1日の青海チベット鉄道の開通と中国政府による「国家非物質文化遺産」、ユネスコの「世界無形文化遺産」への登録、更に地方政府の「レプコン文化」の宣伝により、青海省の観光客が急増した。それに伴い、タンカの流通販売が加速化し、一部の絵師らのタンカの供給先は地方の僧院から観光施設やデパートへと変化した。

また、青海省および黄南州、同仁県などの地方政府は、レプコン芸術によって観光業を発展させる方針を打ち出した。「青海国際タンカ芸術節」と「レプコン芸術節」、「レプコン芸術撮影節」、「レプコン芸術総合展」、「青海省民族文化節」などのイベントと「文化旅行」のWebサイトなどを利用してレプコン文化を宣伝した。また「熱貢・生き生きとした文化都市名城」というテーマで「熱貢文化芸術村」、「熱貢文化長廊」などの建設にも力を入れている。また、7,000万元を投入し「非物質文化遺産博物館」を同仁県に建設することにし、2011年に完成し運営が始まっている。その中に、非物質文化遺産保護センターと非物質文化遺産管理室、熱貢文化生態保護実験区管理室、熱貢芸術館などを設けている。

そして、2001年から青海民族大学の芸術学部でレプコン芸術専攻を設立し、センゲシヨン村出身の有名なシャウツェラン絵師らを大学の教授に招聘した。大学で青海省非物質文化遺産研究所を設け、系統的に「レプコン芸術」の理論と技法、発展史などについて研究を行っている。また、近年、青海省の各自治州にある「州医科専門学校」の改革を行い、ほとんどの州医科専門学校をもとにして州職業技術専門学校を造った。黄南州職業技術専門学校は2005年からタンカ専攻を設け、年に100人余りの学生を募集している。

さらに、絵師らのなかで国と省レベルの受賞歴のある者を中心にレプコン芸術関係の会社を創った。2008年以降、センゲシヨン村のニャンブン絵師の「熱貢画院」を始め、「同仁県金輪熱貢芸術有限公司」、「黄南州熱群熱貢芸人芸術有限公司」、「同仁県央金瑪熱貢芸術発展有限公司」、「青海省熱貢文化伝播有限公司」など数十カ所の会社を相次ぎ成立した。またセンゲシヨン村を中心に各村で数多くの「タンカ工房」出現した。昔のように絵師らがひとりで描く方法から、弟子を募集し、弟子らにタンカを教えながら弟子らのサポートに依って効率的にタンカを描くようになった。これによって、タンカを描く前後の仏教儀礼における修行やタブーなどが失われ、共同制作されたタンカに、「大家だれそののタンカ」というサインをするようになった。これによってタンカの量が増え、値段が上がったものの、タンカの質が下がるなどの問題に直面している。

特に近年、中国の件費や日常用品、肥料、農薬などの物価が急上昇する一方、小麦や大麦、アブラナなど農作物は低価格のままであった。このため農民は農業を放棄し、絵師になる人が増えつつあり、生業にも変化が生じている。その一方で、中国の内陸部やインド、ネパール、タイなどの地域や国へ出稼ぎに出る絵師が増え、これによって外地から絵師を志す者が移入し、レプコン芸術の地域的特性が薄れる傾向が生まれつつある。

さらに、パソコンの技術やネットの普及によりタンカの複写など劣悪品、偽物も出現している。地方政府はタンカの品質、タンカ愛好者の権利を守り、良好なレプコン芸術の市場を確保するため、絵師らを中心にタンカの真偽、水準を鑑別する部門を同仁県に設けた。2006年に「同仁県レプコン芸術職業技能鑑定所」と「同仁県レプコン芸術協会」



写真10 レプコンタンカ品質鑑定書と国家資質検定部門の鑑別書

を成立させた。その後、2007年11月に青海省で「レプコンタンカ地方標準」を作成し、タンカの材料の選別、制作過程、技術、製品の分類など明確な標準を規定した。

2008年に「同仁県レプコンタンカ鑑定センター」を成立し、「中国工芸美術大師」と「青海省工芸美術大師」に選ばれた絵師らが鑑定員を担当する。また、政府が「レプコンタンカの規範および品質鑑定の通知」をテレビやラジオなどで宣伝した<sup>12)</sup>。更に国家資質検定部門もタンカの品質などについて鑑別を行うようになった。

## 8 おわりに

上述したように本稿では青海省の無形文化遺産を概観し、その中でもレプコン芸術に注目した。この地方の代表的タンカの歴史を辿り、その長い歴史の中の変遷、また、近現代における無形文化遺産への登録と登録後の動態などについて記述してきた。チベットの宗教と文化、歴史などと深く結びつき、何世代にもわたって発展してきたタンカは吐蕃王国の時代までに遡ることができる。この地域では14～15世紀以来ツァキャ派とゲルク派が次々と発展し、各地に僧院と仏像を造り、チベット仏教が広範囲に普及した。また、歴史のなかで周辺の他民族や敦煌文化などの影響を受け、レプコン独特の工芸技術が生み出してきたと考えられる。

レプコン芸術はこの地域の人々の世界観と信仰の価値観などを反映しており、歴史の変動とともに変化し、時に布教の手段と時には美術品としての贈り物という性格を持っている。絵師という職業は昔から各王朝や皇帝から重視し、宮殿や僧院の建築師など社会的地位や高い評価を得て優遇されてきたと考えられる。特にこの地域の絵師らは昔、僧侶を中心に信者と絵師という性格が彼らの生活に重なり、タンカを描くことは彼らにとって一つの修行と功德、光栄であった。これはタンカの品質と直接に関わると思う。昨年11月26日に「競売大手クリスティーズ (Christie's) が香港 (Hong Kong) で行ったオークションで600年前のチベットの「タンカ」が3億4,800万香港ドル (約52億7,000万円) で落札され、中国の美術品における競売価格の記録を更新した (AFP)」ように昔のタンカの品質が高いことも推測できる。民主改革や文化大革命など社会変動を経て、僧侶が還俗せざる得なくなり、還俗後、一般の民間に広がったのである<sup>13)</sup>。

特に農業を中心に行ってきたこの地域ではボン教と仏教の深い信仰が人々の生活の隅々に存在していた。そのため、上述したように、1枚のタンカを完成させるにはタンカを描く前後の修行儀礼とタブーなどで数ヶ月間が必要であり、依頼者もチベット地域の信者で、タンカを描くことは自分の功德にもなり、タンカの技術と質が高いと考えられる。しかし、近年、グローバル化と経済発展、観光化および各レベルの非物質文化遺産の登録によりタンカの知名度が高まり、値段が高騰した。これにより農業を中心としてきた生業に変化を生じ、村人が農業を放棄とともに人びとの信仰心が薄くなり、絵師とはた

だ1つの職業になりつつあると考えられる。また、青海省の各大学と地方の専門学校などでタンカ専攻が開設したため、レブコンの伝統的絵師と学校で学ぶ絵師など絵師の数も増えた。レブコン芸術の独特性が薄くなっており、複写と劣等、偽物のタンカなどを市場に販売され、政府もこれらの問題を解決するために、各レベルの専門の鑑定部門を設けて解決しようとしている。これはまさに政府の保護としての無形文化遺産の登録と観光化の政策の矛盾反映しており、短時間に解決できないと考えられる。

## 注

- 1) アムド・カム・ウツァン チベット人は自らの居住地域を3地域に区分し、自治区西部のラサ・シガツェ方面をウィ・ツァン、自治区東部のチャムド地区・四川省甘孜藏族自治州・雲南省デチン藏族自治州・青海省玉樹藏族自治州をカム、玉樹を除く青海省の民族自治州と四川省アバ藏族自治州・甘肅省甘南藏族自治州をアムドという。
- 2) 王子波 [2010: 2-61] および黄南州概況修訂編委會 [2008: 78-81] を参照した。
- 3) 王昱編 [2008: 52-54] を参照した。
- 4) 李焼燕「青海非物質文化遺産保護現状と対策研究」『青海社会科学』2011(4): 45-46。
- 5) 東噶・洛桑赤例 『東噶藏学大辞典』北京: 中国藏学出版社。
- 6) 更登華蔵『漫話熱貢』蘭州: 甘肅民族出版社, p.70-71。
- 7) 『黄南州概況』民族出版社, p.303-305。
- 8) 多傑加 『熱貢旅遊手冊』西寧: 青海民族出版社, p.531。
- 9) 文化庁のWebサイト [http://www.bunka.go.jp/1hogo/mukeibunkaisan\\_hogo.html](http://www.bunka.go.jp/1hogo/mukeibunkaisan_hogo.html) (2015.1.17検索)。
- 10) 象仁賽「熱貢文化生態保護実験区建設と発展問題初探」『西藏芸術研究』2011(4): 74-75。
- 11) 公益財団法人日中友好会館のWebサイト <http://www.jcfc.or.jp/blog/archives/5436> (2015.1.5検索)
- 12) 人民網Webサイト「青海黄南藏族自治州处理“熱貢芸術”保護与發展關係紀実」 <http://politics.people.com.cn/GB/14562/12581697.html> (2015.1.4検索)。
- 13) 「レブコン芸術の故郷」と呼ばれるセンゲション村を中心としたこの地域の五つの村では男性を中心に伝統的農業を営み、農閑期のみ副業として仏画を作って来た。女性は農閑期には出稼ぎなどをする事もあったが、基本的には自給自足の暮らしをして来た。

ところが「レブコン芸術」が無形文化遺産に登録されてから数年後、タンカの値段が高騰し、タンカによる収入が大幅に増えた。これによりほとんどの村人が農業を放棄し、タンカの制作に従事するようになった。こどもの教育はいちじるしく「後退」し、従来は義務教育である初級中学卒業が一般的であったが、その後は中途退学あるいは初級中学に進学せず、代わりにタンカの制作技術を勉強する者が増加した。これにより全家族がタンカの制作を行なう家族も出てきた。

また、タンカ制作技術は、従来5つの村を中心に村落やコミュニティ内部で父子相伝か、僧院での師弟相伝という限られたかたちで伝承されてきた。無形文化遺産に指定された後は、画院、専門学校が設立され、男女の性別や村落内外、民族などの違いに関係なく学べるようになった。

## 参考文献

### ●日本語文献

デイヴィッド・ジャクソン著 瀬戸敦朗、田上操、小野田俊蔵共訳。

2006 『チベット絵画の歴史 偉大な絵師達の絵画様式とその伝統』東京：平河出版社。

チョルテンジャブ

2014 「チベットアムド地域におけるルロ祭の社会的意義について」『日本チベット学会々報』60: 103-121。

服部等作ほか（編）

2008 『チベット仏画制作センターにおける伝統技法用法と継承に関する研究』広島市立大学芸術学部。

2001 『チベット族の美術と芸能』アジア遊学 23、東京 勉誠出版。

馮 彤

2007 「中国の無形文化財の保護に対する一考察」『北東アジア研究』13、徳島県立大学 p.137-147。

### ●チベット語文献

dKon mchog bstan pa rab rgyas, Brag dgon pa

1982 mDo smad chos'byung deb ther rgya mtsho. Lan gru: Kan su'u mi rigs dpe skrunkhang. (智貢巴・貢去乎丹巴繞布傑『安多政教史』蘭州：甘肅民族出版社)

mKhar rtse rgyal (Reb gong pa)

2009 'Jig rten mchod bstod: mdo smad reb gong yul gyi drug pa'i lha zla chen mo'i mchod pa dang 'brel ba'i dmangs srol rig gnas lo rgyus skor gyi zhib 'jug. Pe cin: Krung go'i bod rig pa dpe skrun khang. (熱貢・卡爾沢傑『世間礼贊：安多熱貢地区民間祭祀“六月會”歷史文化內涵研究』北京：中国藏学出版社)

dGe 'dun chos 'phel

1980 Deb thar dkar po. Zi ling: mTsho sngon mi rigs slob gling grangs nyung mi rigs skad yig sde khag. (更登求培『藏族白史』西寧：青海民族学院少数民族文学系)

dGe 'dun dpal bzang, Chu skyes

2007 Reb gong yul skor zin tho. Lan gru: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. (更登華蔵『漫話熱貢』蘭州：甘肅民族出版社)

'Jigs med theg mchog

1988 Rong bo dgon chen gyi gdan rabs. Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang (吉迈特却『隆务寺志』西寧：青海民族出版社)

'Jigs med bsam grub (Reb gong pa)

2005 Reb gong seng ge gshong gi lo rgyus gangs ri'i chu rgyun zhes bya ba. Pe cin mi rigs dpe skrun khang (吉美桑珠『熱貢森格雄部落研究』北京：民族出版社)

2013 mDo smd reb gong lo rgyus chen mo ngo mtshar gtam gyi bang mdzod. Pe cin mi rigs dpe skrun khang (吉美桑珠『安多熱貢歷史広説』北京：民族出版社)

Dung dkar blo bzang 'phrin las

2002 Dung dkar tshig mdzod chen mo. Pe cin: krung go'i bod rig pa dpe skrun khang (東噶・洛桑赤例『東噶藏学大辞典』北京：中国藏学出版社)

rDo rje rgyal (Reb gong pa)

- 2011 Reb gong gnas skor deb ther. Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. (多傑加 『熱貢旅遊手冊』西寧：青海民族出版社)

'Brug thar dang sangs rgyas tshe ring gnyis kyis brtsams

- 2005 mDo smad rma khug tsha 'gram yul gru'i lo rgyus deb ther chen mo. Pe cin mi rigs dpe skrun khang (洲塔 桑傑才讓 『甘青藏族部落社会文化史研究』北京 民族出版社)

Blo bzang mkhyen rab

- 2005 mDo smad re skong rig pa 'byung ba'i grong khyer le lag dang bcas pa'i lugs gnyis gnam gyi bang mdzod las bsdus pa'i chos 'byung sa yi lhamo. Delhi

Blo bzang snyan grags

- 2000 gNyang thog byams pa gling gi lo rgyus. Zi ling: mTsho sngon mi rigs dpe skrun khang. (洛桑年智 著『年都乎簡志』西寧：青海民族出版社)

Bla ma tshe ring (Gling rgya ba)

- 2002 Reb gong gser mo ljong kyi chos srid byung ba brjod pa 'dod 'byung gter gyi bum bzang. Hong Kong: Zhang kang then m'a dpe skrun khang (腊玛才让『腊玛才让文集』香港：天马圖書有限公司)

brTson 'grus rab rgyas (ed.)

- 2007 Krung go bod kyi rig gnas sgyu rtsal kun 'dus zhal thang chen mo'i mam bshad mthong grol kun gsal me long. Pe cin: Mi rigs dpe skrun khang. (宗者拉傑（編）『中国藏族文化艺术彩绘大观图说明鏡』北京：民族出版社)

Tshe dbang rdo rje

- 2009 Reb gong rig gnas sgyu rtsal zhib 'jug. Lan gru: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. (才項多傑『熱貢文化藝術研究』蘭州：甘肅民族出版社)

●中国語文献

黄南藏族自治州概況編写組

- 2008 『黄南藏族自治州概況』民族出版社。

康保成 編

- 2011 『中国非物質文化遺産保護發展報告（2011）』社会科学文献出版社。

馬成俊 編

- 2003 『神秘的熱貢文化』文化藝術出版社。

青海省誌編集委員會 編

- 1987 『青海歷史紀要』青海人民出版社。

王子波 編

- 2010 『魅力青海』青海人民出版社。

王 昱 編

- 2008 『青海歷史文化与旅遊開發』西寧：青海人民出版社。

中国非物質文化遺産保護中心 編

- 2007 『中国非物質文化遺産普查手冊』文化藝術出版社。

付記

本稿は平成26年度科学研究費補助金(特別研究員奨励費)による研究成果の一部である。